

## 監訳者あとがき

著者クルト・ドゥブーフは多面的な顔をもつ。政治家のスピーチライターであり、ジャーナリストであり、歴史の研究者でもある。現在は中道系ユーロ政党New Europe が間接的に関わるウェブニュース、EUobserverの編集長をつとめる。これはEU研究者には欠かせないニュース媒体だ。関心も知識も多方面におよぶ。とても気さくで、ブリュッセルを訪ねたわたしたち翻訳者チームを快く迎えてくれた。関係も足を運ぶというブリュッセル老舗の、しかしとてもカジュアルな感覚で利用できるレストランでの夜は、いままもありありと思いつける実に愉快なひとときであった。

ただ翻訳作業には困難がともなった。小松崎利明（天理大学）、武田健（東海大学）、松尾秀哉（龍谷大学）そして臼井陽一郎（新潟国際情報大学）が手分けして下訳を作り、二泊三日の新潟合宿により2020年2月にはドラフトの完成にこぎ着けていたものの、そこからの訳文チェックに時間がかかった。新型コロナウイルス感染拡大により対面の研究会はもはやかなわず、このチームのメンバーそれぞれがオンライン講義その他の仕事に忙殺された。しかし週に1〜2度のペースで空き時間を見つけて、オンラインで訳文チェック会合を開き、一文一文、一語一語を検討した。とくに精神分析を主題とするチャプター7は困難を極め、この分野の専門家である仲淳氏（天理大学）に訳文をチェックし

ていただいた。またイスラーム関係の用語については、澤井真氏（天理大学）と濱中新吾氏（龍谷大学）にご教示いただいた。著者ドゥブーフの曾祖父の怒ったときの顔の独特の表情については、岡井誠氏（おかいデンタルクリニック）にお教えいただいた。ここに謝意を表したい。そして最後はドゥブーフ本人にもオンライン学会に参加してもらい、ファイナルタッチの時を迎えたのが9月であった。本書の翻訳の出版を編集者の兼子千亜紀氏にお引き受けいただいてからほぼ1年。頃合いを見計らった励ましのメールの数々に、この場を借りて御礼を申し上げたい。またぜひみなで飲みにいきましょう。

なお本書は科学研究費補助金による研究の成果の一部である（研究代表者・白井陽一郎「EUの規範パワールの持続可能性に関する実証研究」17H02497基盤研究(B)および研究代表者・松尾秀哉「なぜブリュッセルはテロの巣窟と化したか——もう一つの『連邦制の逆説』」18K01441基盤研究(C)。

ドゥブーフが本書で展開したのは、グローバル化を蝕んでいく動きである。わたしたちは、国境を超えていくさまざまな動きについてはグローバル化というタームで一括するものの、その反対の動きに対しては反の一字をつけて終えてしまう。しかし、反グローバル化と一口にいつても、その実態は実に多様だ。

グローバルであることは良くも悪くもナショナルを超えていくことを含意するが、それはけっして、脱ナショナル化だけを意味するわけではない。国家だけがグローバル化の主体ではないし、その動因でもない。さまざまな非国家主体がグローバル化のうねりを創り出してきたのである。では、そうしたグローバル化に反する動きはどうか。いうまでもなく、反グローバル化の実態は再ナシヨ

ナル化だけではあるまい。グローバル化が示す多様性が、反グローバル化については実に単純化されてしまう。反グローバル化という事態の本質をつかむためには、どういった用語が求められるだろうか。本書は反グローバル化の特質をたんにシンブルに再ナショナル化で終わらせようとはしない。その特質を掴むために、本書はトライバル化という用語を提案する。

トライバル化とは何であるうか。本書にアカデミック・スタイルともいべき厳密な定義は存在しない。関連概念との関係を学史的に跡づけ、現状分析におけるその意義や今後の理論的展開を考察したチャプターもない。しかしとはいえ、それは欠点とも言い難い。本書はむしろ、多くの人びとに実にわかりやすく、事例列挙的な説明を試みる。さまざまな事例にトライバル化の現れが読み解かれていく。アンチEUもしくはアンチ・ブリュッセルを掲げる極右的ポピュリズムから、中東各地を拠点に跋扈する暴力集団——もしくは欧米視点でいうところのテロリストたち——まで、またEUからの「解放」を意味するBrexit（イギリスのEU離脱）や世界の理不尽から「アメリカを救う」はずのトランプ政治や、「正統なるロシア的なるもの」の回復をどこまでもねらうプーチンの政治まで、実にさまざまな形をとる。しかしその論理はシンブルだ。他者はすべてからく敵だとみる純粹なる同胞的集合の構築と、境界線の開放は破壊的他者の流入だと決めつける敵意、これである。

本書にとつて世界史とはグローバル化とトライバル化の変遷である。世界はもともと部族的集団の境界を超えて広がっていく動きに充ちているのであるが、それが逆転し、開かれたドアは閉じられ、橋は壊され、壁が作られる時期が必ずやってくる。そのとき、戦争の危機がリアルに生じてくる。こうしたとてつもなく大きな話の節々に、たとえばナチスのために闘ったベルギー人のエピソード——

ドゥブーフ自身の大叔父の物語——が織り込まれていく。読者を飽きさせない工夫が実に上手い。考察の視角には精神分析的なものも加えられる。これも本書の特色のひとつだ。鬱病の世界的な蔓延、ここにドゥブーフは注意を引く。彼自身の周辺の間人関係に見られる精神疾患の広がりをとっかかりに、人びとのアイデンティティの問題へまで議論は進んでいく。そして、ある集団がトラウマを抱え込んでしまった場合の自己防衛の反応としてトライバル化の発生が説明される。トライバル化の要因は実に広範なことがらに及んでみるとみられる。

このように、トライバル化という現象をジャーナリスティックな筆致で描き出し、その意味を抉り取るうとしたのが本書であるが、著者ドゥブーフ本人の体験がちりばめられているのが魅力的である。彼は、中東で、南東欧で、西欧で、まさにトライバル化の現場に立ち会ってきた。時代のリアルを目撃してきたのである。トルコからシリアへと、不法入国<sup>1</sup>し、反アサドの拠点都市で彼が目撃した光景は、読者の眼前にグローバル社会の現実を突きつけている。

本書がトライバル化という用語でとらえようとする動き、つまりグローバル化を損ってしまふさまざまな動きが、たとえ局所的にはあれ、ますます不可逆的に集積していくとき、大きな戦争が生じやすくなるという。これが本書の基本となる見方だ。21世紀もすでに20年が過ぎ去った現在、その可能性が高まっているとドゥブーフはいう。来たるべき戦争を防ぐ方法について、彼のメッセージはしかし実にシンプルだ。グローバル化の真の意味を——文化を破壊し格差をもたらす類いの暴風雨のようなものではなく、人びとをこの地球上でつないでいく創造的な平和のうねりのようなものとして

——理解していくこと、これが肝要である。

したがって望むべくは、本書の存在がまったく意味をなさない世界の到来であるが、なかなかそうもいきそうにない。本書の原著は2019年にベルギーの出版社 ASP Editions から出版されているが、本書の主張は2020年以降の時代にあってもますます必要とされてしまっている。2020年の年初以来発生した新型コロナウイルス感染拡大により、世界はまたたくうちに変わってしまった。トラウマの集合的発生による精神的抑圧が、人びとをトライブへと向かわせるといふドゥブーフの見立ては、このコロナ禍にあって説得力を増している。わたしたち翻訳チームが日本語版読者向けに執筆を依頼した序文のなかで、ドゥブーフはトライバル化が加速していくコロナ禍の世界に悲観的な展望を記している。けれども、コロナ禍に立ち向かうためには、ドゥブーフが言うところの真のグローバル化が実現されなければならないということも、たしかに以前にも増して、共有が進む認識となっている。いままさに、グローバルな連携が求められている。わたしたちはグローバル化の正しいあり方を引き続き、模索していかなければならない。本書のメッセージを読者と共有できることをここから願いつつ、筆を擱きたい。

2020年8月25日、新潟市西区のとあるカフェにて

白井陽一郎